

# 障害者の性とセックスワーク

要 友紀子 (SWASH代表)

## 障害者の性に投影される社会の性規範

障害者の性の問題は、社会の性規範や慣習的な性を基準に語られることが多いと思います。それが、時として障害者の性を不自由なものにさせてしまうことがあるのではないのでしょうか。

### 社会の性規範

家父長制的

異性愛主義的

健全主義的

## 性規範から疎外された体・規格外の性

(セックスワーカーの性、障害者の性など)

ステイグマ化  
不可視化

- ・政治的介入を受ける性器
- ・性役割、セックスが規格外
- ・セクマイ、Xジェンダー、Aセク、etc
- ・去勢 (インターセックス等)



(障害者の性に関するスペインのドキュメンタリー映画「Yes, We Fuck!」より)

このような意味において、セックスワークというのは、身体や性器に課せられた社会的コードや性役割を壊す場でもあります。

セックスワーカーは、多くの顧客の多様な性欲のあり方、快楽の得かた、フェティシズム、性的嗜好 (つまり変態さんたち) について経験的によく知り、顧客と共同作業するからです。

しかし、一般的に障害者の性のことになると、そのような性的実践の多様性は (周囲の人々が) 忘れがちになり、男性であればとにかく射精介助が目指すべき性のノーマライゼーション、バリアフリーだと捉える向きがあります。“障害者向け”と特別視することの意味と中身を考えたいです。

## セックスに存在する“正解と基準” (慣習的セックス)

- ・膣ペニス性交
- ・性器中心主義
- ・慣習的エロ
- ・性愛、生殖主義
- ・射精、オーガズム至上主義

## 自分を軸にした 幅広い性的関心・実践

- ・性器以外のマージナルな実践
- ・快楽的な実践
- ・どこからどこまでがセックスなのかという、セックスの脱構築
- ・身体のすべてを性的なものにする
- ・楽しんだかどうか

## ネガティブな性のお話だけでなく、 ポジティブな性のお話もできないと当事者と話し合えない

セックスワーカーにとっても、障害者にとっても、誰にとっても、性をオープンに楽しく話せるようになることは切実です。

しかしながら今の社会で、性に関する多くのことは、ネガティブな情報やイメージに溢れています。

(障害の有無に限らず)女性の身に起こる性的なことは特に、“汚れ”に関連付けられることが多いです。

知的障害のある人々は、性被害と妊娠、または性行動についての周囲の心配の議論が多いと思いますが、そのような相談も受けたことがあります。

知的障害の子どもたちや若者は、施設でも家庭でも、ノンジェンダーかハイパーセクシュアリティのように思われることがあるのかなという印象を受けました。

どうしても性のリスク面に焦点を当てた議論が多いと思いますが、それを強調しすぎる余りに、解決方法が、知的障害者を性から遠ざけるという極端な考え方になる恐

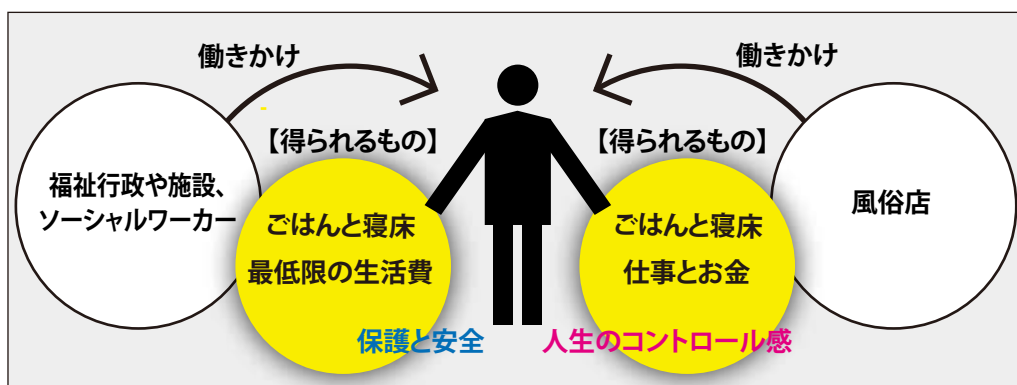
れもあります。

人間としてどう生きたいかという欲望の問題、みんなと同じように自分の限界を知り、自分のやりたいことを知ること、何が心配で、何が怖いと思っているのか、どのように性的なパートナーと出会いたいのか。このような話し合いをするには、性のネガティブな面だけでなく、ポジティブな面も知り、性の喜びや幸せについても話し合えることが大事だと思います。

例えば、1950年代から性教育が義務付けられているスウェーデンでさえ、買春者処罰法があるがゆえに、知的障害者の人も(健常者と同じように)、セックスワーカーと会ったりしていても、周囲の人には本当のことを言わず隠そうとするそうです。

## なぜ風俗で働く人々を、労働課題でなく福祉課題とするのか

近年ホワイトハンズの風テラスは、「激安風俗店で働く女性たちには、知的障害の女性もいる」ということをマスメディアで繰り返し喧伝し、そこで働く女性たちへの“福祉支援”の必要性を強調して呼びかけています。



なぜ“福祉支援”だけが焦点化され、労働者の安全や再分配など労働課題の視点が排除されてるのか。福祉的支援が必要か、労働面での支援や改革が必要か、どのようなサポートがほしいかは、個々の当事者が決めることであるはずだ。

この風テラスの“福祉支援”には前段として、ホワイトハンズが初期の頃に構想した、風俗店の「社会性護センター化構想」があると思います。それは、「性サービスに従事する者は、高卒以上で、借金がなく、性感染症に関する知識を習得し、前科がない云々を条件とすべき」というシロモノで、そこに当てはまらない者は、風俗業から締め出されて仕方がないという発想です。

つまり、この社会が持つ未成熟／未発達概念を、こ風テラスでも援用し、知的障害があると疑われる人が

いるという激安風俗店の従業員らは、労働者として扱うのではなく、保護更生の対象として、福祉支援の対象にしようという、差別的まなざしを感じます。

このような風テラスの活動は、以下の三位一体の支持を得て称賛されています。

- ①障害その他困難を抱える人々が風俗で働かなくて済むことが本人の幸せだと考える人々／障害者、セックスワーカーには“特別支援”が必要と考える人々
- ②セックスワークの労働の安全環境を整備するよりも、そもそもセックスワークは本来あってはならない仕事だと考える人々
- ③センセーショナルでスキャンダラスなテーマでアクセスと読者を獲得したい出版社・メディアと、その需要を持つ読者

## 風テラスの主な支持層

障害その他困難を抱える人々が風俗で働かなくて済むことが本人の幸せだと考える人々

障害者、セックスワーカーには“特別支援”が必要で、セックスワークは本来あってはならないと考える人々

## 福祉支援フレームの需要

センセーショナルでスキャンダルなテーマを求める出版社・メディア

感動ポルノ、貧困ポルノとして消費する人々

数多くあるセックスワーカーの抱える悩みや相談、困難の種類のうち、一部だけが焦点化される

性感染症 アウティング **知的障害**

客とのトラブル ストーカー 職場環境 精神科系 契約内容お金 セクマイ 業務内容 性暴力 家族 妊娠 友人 法律 恋愛 産婦人科系 中絶 借金 同業とのつながり 福祉 職場の人間関係 暴力団 就職 転職 AVお店の見つけ方 DV 結婚 子育て 確定申告

障害や困難を抱える人々が働く数多くある様々な職業のうち、性産業だけが焦点化される

**性産業**

工業 農業 漁業 林業 飲食業  
教育産業 IT産業 製造業 建設業  
芸術 金融保険業 サービス業 不動産業  
原発作業 軍需産業

このような世論の展望を見越しての、ニッチ市場に着目するホワイトハンズの貧困ポルノ・感動ポルノ的発想と広告代理店的やり方は、知的障害者、セックスワーカー両方の差別や偏見を利用して、とても問題があると思います。

じゃあどうすれば差別助長にならないかという、性

風俗で働く人だけをターゲットにせず、あらゆる職業の職場にいる、知的障害があるかもしれない人、発達障害の人、生きづらさや困難を抱えている人を支援対象にして、仕事で選別しなければいいだけのことなのです。障害や困難を抱える人は大概の職業におります。

## 何が障害者利用で、利用でないか

私たちがまた、セックスワーカーの顧客に障害者もいるということを映画「スカーレットロード」上映会などの活動で取り上げるとき、「セックスワークの仕事肯定するために障害者の性のバリアフリーの問題を利用し

ているのではないか」とか、「性的に楽しむのが難しいかわいそうな障害者」というイメージ（有徴化）を助長するのではないかと懸念を持たれることがあります。



(障害者に性的サービスを提供するセックスワーカーのドキュメンタリー映画「スカーレットロード」より)

私も、そのことを心配していたので、長らくセックスワークと障害者の性に関連する発言を控えていましたし、障害者向けデリヘルで働くメンバーもいましたが、

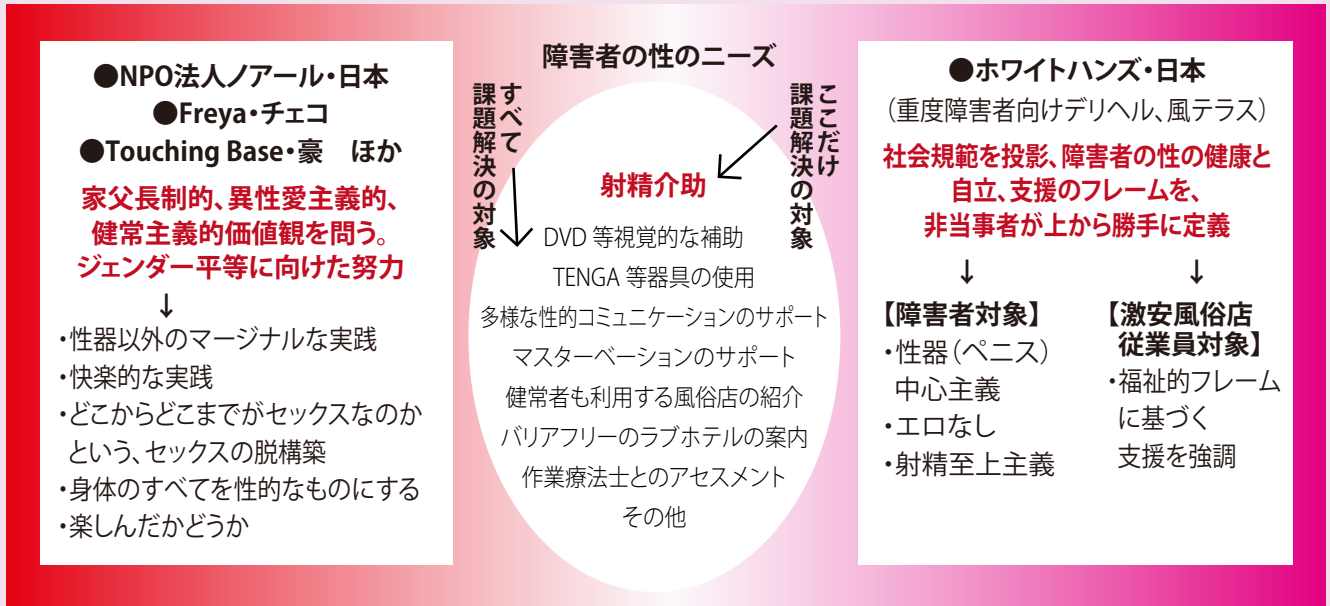
あえてそのことを公に紹介することはありませんでした。

私が考える、障害者の性の問題の関わり方の問題意識というのは、図にするとこうなります。

## 障害者の有徴化をめぐる特徴

障害者の脱有徴化の特徴としては、当事者の様々なニーズに応えつつも、社会の主流秩序的な達成目標については、これらが生み出す抑圧や不平等の是正に関し、平行して意識的に取り組んでいるところがポイント。障害者だけを有徴化するのではなく、健常者も私たちがすべてを有徴化する。

### ◀ 障害者を脱有徴化+当事者主体+課題解決+アドボカシー 非当事者+“課題解決”型+障害者を有徴化 ▶



障害者を脱有徴化するという事は、私たち（健常者）の問題として私たちが有徴化するという事。それが障害者を有徴化／差別／利用しないということではないかと思えます。

セックスワーカー／障害者の利害やニーズに関わる

事だけに関心を持つ（＝特定の課題解決だけに関心を持つ／持たれる）のは、社会の主流秩序（な考え方）に收拾されるパターンが多いです。課題に取り組みつつ、課題が出てくる原因や枠組み自体を問う視点が大事だと思います。

## セックスワーカーと障害者の連帯

以上のようなことが十分に押さえられた上で、海外ではセックスワーカーと障害者が連帯している団体がいくつもあります。

(2015年、台湾のセックスワーカー支援団体COSWASと街頭行動をともにする障害者の頼さん)



セックスワーカー、顧客の障害者双方にとって、性的サービスの売買に社会的理解がないと、必要なサポートを周囲に求めにくくなるからです。セックスワークの犯罪化や規制は、言語障害のある人にとって困るネット規制や、時として買春者処罰を伴います。

障害者向けデリヘルで働いたあるセックスワーカーは、「施設の職員の理解がないため、みんなが寝静まっ

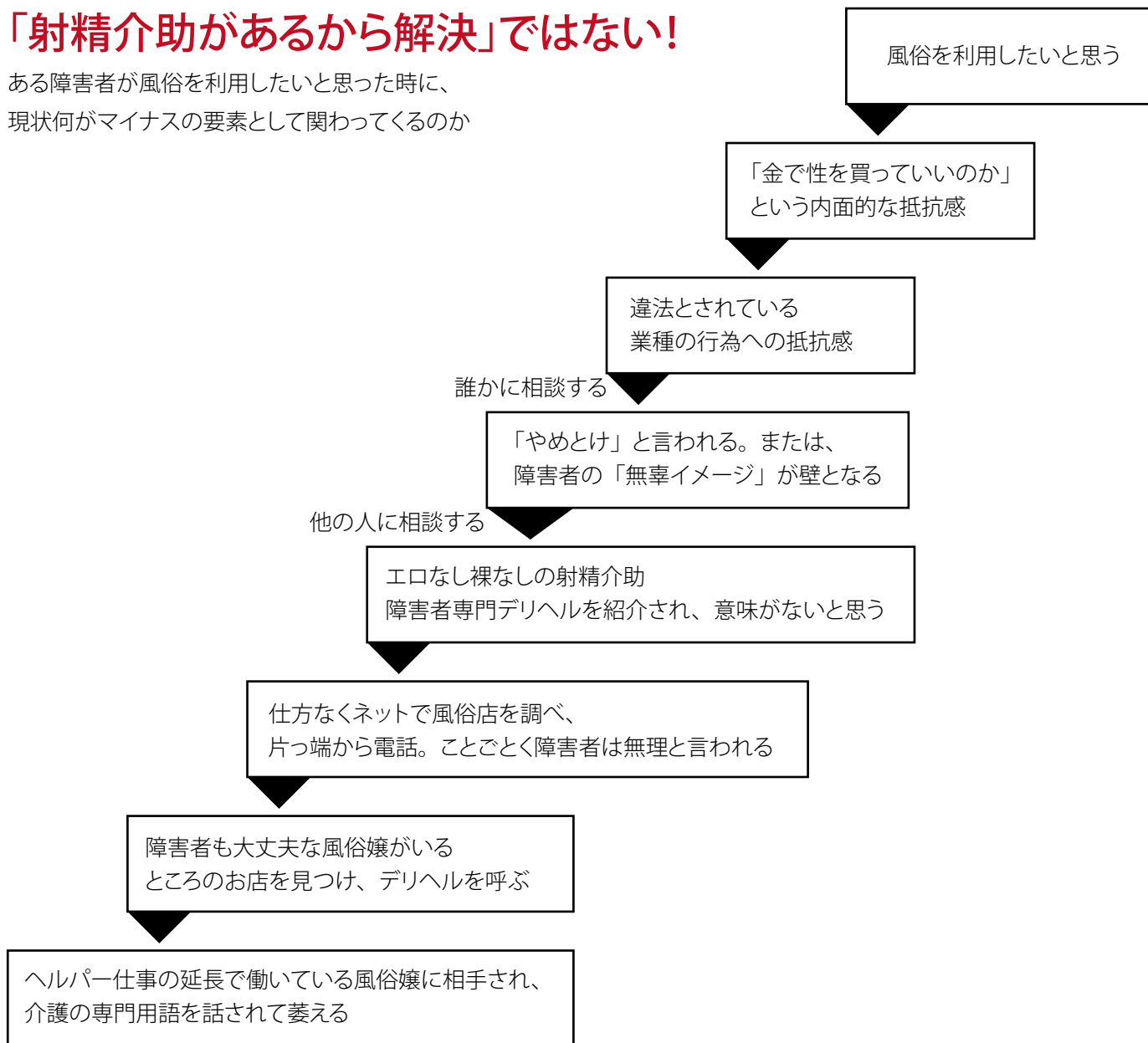
た夜中に、見つからないようにコソコソと泥棒のように施設に入り、お客さんのところまで行った」と言います。

このような支障の数々はまだ社会で明らかにされていません。それはやはりセックスワークがタブーになっていることが関係していると思います。障害者の性とセックスワーク、両方への理解が進んでほしいです。



# 「射精介助があるから解決」ではない!

ある障害者が風俗を利用したいと思った時に、  
現状何がマイナスの要素として関わってくるのか



## 【参考にした団体、映画、講演等】

- 障害者とセックスワーカーを繋ぐ豪の活動団体 Touching Base

<http://www.touchingbase.org/>

- 「障害者向けデリヘルで働くということ」 えりか（元デリヘル嬢）著（2017年 SWASH 発行、ドキュメンタリー映画「スカーレットロード」日本版公式パンフレット所収）

<http://swashweb.sakura.ne.jp/node/166>

- 障害者の性に関するスペインのドキュメンタリー映画「Yes, We Fuck!」（2015年）

<http://www.yeswefuck.org/>

- 日春關懷互助協會 (COSWAS) と障害者の連帯についてのレポート (2016年 SWASH 発行「セックスワーカーは場所を要求する! アジアセックスワーカーアクションワークショップ 2015 報告書」所収)

<http://swashweb.sakura.ne.jp/file/taipeiworkshop2015.pdf>

- シャーロット・ローフグレン - モーテンセン（マルメ大学）の講演「知的障害のある若者と性教育」（2017年10月15日、日本性科学会第37回学術集会）